

「食の安全」を守るため、今とでもできることから―― 放射能の検出ゼロをめざして。

3月に発生した東京電力福島第一原発の事故。目に見えない放射性物質の飛散は、食の安全を求める組合員はもちろんのこと、長年にわたって土づくりを行い、農業・化学肥料の心配のない農産物の生産に努めてきた生産者たちにとっても、大きな脅威となっています。農薬・化学肥料、そして放射能汚染の心配のない、子どもたちが安心して食べられる農産物づくりのために、パルシステムでは産直産地とともに放射能不検出を最終目標とした低減作業に、着実に取り組んでいます。



左から佐原農産物供給センター(千葉県・茨城県)の静(しずか)利和さん、パルシステム連合会産直推進部 部長・高橋宏通、佐原農産物供給センターの常務理事・香取政典さん

汚染レベルは低くても、まず「不安を払拭する」ために

佐原は、千葉県香取市を中心とした産直産地。原発事故の影響は比較的少なく、現在検出されている放射能の値はセシウムで土壌1kg当たり平均150ベクレルで、国の基準5000ベクレルを大幅に下回っています。それでも、佐原では今年6月から、パルシステムとともに放射能の低減実験を開始しました。その理由について、常務理事の香取政典さんは「組合員のみなさんの不安を少しでも解消したい。だから、ここで実験を行う意味があると感じました」と話します。

パルシステム職員や有志とともにひまわり栽培

そこでセシウムの吸着で注目を集めているひまわりの栽培を佐原でスタート。パルシステム編集室の有志が中心となり、種まきを行いました。また、7月に行った間引き作業には佐原での研修の合間に、パルシステム職員が参加。作業をした人事部の横山玄多は「土をよみがえらせた、という香取さんのお話に感銘を受けました。何か自分たちができることを、という一心で間引きをしましたね」

今後は、土壌や刈りとったひまわりの検査を実施。低減にどの程度の効果があるのかをしっかりと調べていきます。さらに、収穫後のひまわりの処理に関しても再汚染を上げないような方法を考えていきます。

	放射性セシウム	放射性ヨウ素
花実	20.7	検出せず
葉茎	8.6	検出せず
根	96.0	検出せず

単位はベクレル/kg。検出限界は、放射性セシウム:10ベクレル/kg、放射性ヨウ素:20ベクレル/kg程度です

パルシステムではひまわりのほか、大豆・菜種などの栽培実験、表土の除去、ゼオライトの散布など、さまざまな方法で農地の放射能低減に取り組んでいます。佐原農産物供給センターでのひまわり栽培の実験後に行った放射能検査の結果は、下記の通りです。

子どもたちが安心して食べられる農産物づくりを
パルシステム生活組合連合会産直推進部部長・高橋宏通は「放射能の安全性にはしきい値がありません。だからこそ生産者は『子どもが安心して食べられるように』と、たとえ汚染が軽度であっても、3月11日以前の畑に戻れるよう努力を続けています。そんな産地に対し、パルシステムは全力でサポートし、ともにこの問題に立ち向かっていきます」と話します。

他産地でも始まっています！

民間稲作研究所(栃木県)の取り組み

ひまわり・大豆・菜種を栽培し、大きな除染効果を確認！

『コア・フード米』の産地のひとつである、日本の稲作を守る会(栃木県)。その指導組織である民間稲作研究所(栃木県)は、有機栽培での稲作技術の研究・推進を主とするNPO法人です。放射性物質による土壤汚染に危機感をもった代表の稲葉光國(みつくに)さんは、震災以降、いち早く独自のプログラムを作り、活動を始めています。セシウムの低減に有効とされるひまわりをはじめ、大豆、菜種を組み合わせて、通年で低減作業を進める計画です。「今年はず、ひまわりと大豆の栽培を会員生産者のいる福島県南相馬市と栃木県上三川町で始めています」(稲葉さん)

また、これらの作物はすべて、種や実から油を搾れるのも特徴。そのため「やるからには、経営として成り立つように」という言葉どおり、セシウムが油に溶けない性質を生かして、ひまわり、大豆、菜種の植物油にすることも視野に入れています。「一日でも早く低減作業をすすめて、汚染を減らす努力を続けていきます」



民間稲作研究所(栃木県)のひまわり畑にて。会員産地、浦部農園の浦部修さん(左)と代表の稲葉光國さん(右)



搾油のための機械も、取り寄せました

【実験結果速報】8月29日、福島県にある日本の稲作を守る会会員の農地で栽培したひまわりを収穫し検査を実施したところ、作付けをしていない土壌では4090ベクレル/kgであったのに対し、作付け後の土壌は2590ベクレル/kgと大きな低減がみられました。